

消費者からみた須恵器の流通 ― 鞠智城・官衙・周辺集落の比較検討を通して ―

太田 智

一．はじめに

還元焰焼成によつて、硬質堅致で青灰色という従来にはない特徴を獲得した須恵器は、日本列島での導入以来、祭祀儀礼や日用品など様々な場面で使用され続けた。また製作・築窯・焼成技術などの専門性の高さと、多様な使用目的のため、様々な生産システムが準備された（太田二〇一五・二〇一六）。では、周辺に須恵器生産地のない鞠智城ではどのように須恵器が運ばれたのか。古墳時代から古代までは、牛頸・八女・荒尾・宇城窯跡群から運ばれることが判明しており（木村二〇二二a、網田二〇〇三など）、各生産地の流通範囲が明らかとなった。しかし、八世紀代の周辺遺跡の流通状況や、遠隔地で生産された須恵器がどのように消費地へ運ばれたなど、不明な点が多い。

以上の問題意識から、「須恵器がどのように運ばれたのか」を明らかにするため、二つの概念を用いて検討する。

二．研究の視点と方法

（一）同一時焼成品と同一工房製品概念規定

本稿では、同一時焼成品と同一工房製品をつかみ、古代山城や周辺の集落、官衙などとの比較検討から①どのように須恵器が消費地まで運ばれたのか ②生産システム（あるいは体制）との関連 ③

古代の鞠智城周辺の須恵器流通状況の解明を目的とする。そのためには同一時焼成品・同一工房製品の概念とその認定基準を定めておく必要がある。

・同一時焼成品

同一時焼成品とは、文字通り同じタイミングで焼成された製品の一群を指す。その際、焼成された製品は、窯詰位置や状況にもよるが、大まかには同じような色調や黒化、自然釉が確認できる。また、各地の須恵器窯は、焼成技術の難しさから、焼成回ごとで焼き上がりが異なることがある。これは、灰原出土資料での焼成状況の多様性からも容易に想像できる。

・同一工房製品

同じ工房で製作された製品の一群を指す。現状の須恵器流通研究は、一窯跡群レベル単位での把握が多い。しかし、牛頸窯跡群を例にとつても、多数の須恵器製作集団が集まり生産に当たり、多様性を持つ生産システムの集合体が窯跡群を形成するパターンもある（太田二〇一五）。

（二）同一工房製品・同一時焼成品の認定条件

このうち、須恵器の製作地は、様々な観察項目から判断される。ただし、検討の煩雑さや、須恵器の多さによる検討量の多さから、

その客観的な資料提示を貫徹するのは難しい。さらに、須恵器の諸属性は、単に窯跡群での生産地を示すだけでなく、様々な点を示す場合が多い。

・須恵器の細部形態

山本雅和氏は、陶邑窯跡群での窯内・灰原出土遺物を対象に須恵器生産組織に迫るため検討する際、坏身・坏蓋の形態を重視し、口縁端部をそれぞれ三種ずつ分類し、これを他の観察項目と組み合わせることで、須恵器工人の姿を明瞭にした（山本二〇〇八）。また、生産地以外の遺跡で出た資料の産地同定を実施する場合、肉眼観察での形態差が重要視される（網田二〇〇三、鈴木二〇一四）。客観性に欠くとの指摘も当然あるが、依然、重要な視点に変わりはない。つまり、細部形態の属性を見極めることで、須恵器工人集団差に近づけられる。

・法量

須恵器は一般的に器形や法量で斉一性を持つといわれるが、実際は焼成時の焼け縮みや工人差で、あるいは窯群ごとで違うことが多い。山田元樹氏は、窯内一括出土遺物の属性分析から同一時焼成品でも工人によって法量分布が異なる点を明証した（山田一九八八）。つまり、法量と他の観察項目を組み合わせれば、工房・各工人ごとの製品のまとまりを把握できる可能性を秘める。ただ、その際、完形か、全体を正確に復元できる程度の遺存度（口径ならば、全体の4分の1程度）が最低条件で、これ以下ならば、わずかな焼き歪みやその他の要因で正確な法量が出ない。鞠智城と周辺の遺跡では、条件を満たす資料が非常に限られる。よって、本稿では参考程度にとどめざるを得なかった。

との関係を明らかにした（後藤二〇〇〇）。以上から、土器の胎土は、生産地の特定に役立つといえる。ただし、肉眼観察では、理化学的分析ほど正確な結果は当然得られない。他の観察項目と合わせて検討することが最も重要と考える。

・ヘラ記号

成形後、意識的に刻むヘラ記号に関する研究は多いが、大きくまとめると①窯内での区別のためとする立場（山田一九八八、中村一九七七）上位階層への作業量の認定（山本二〇〇八）④窯内での工人ごとの区別と消費地との区別の両方（岡田二〇〇四）になる。解釈は様々だが、ヘラ記号の差が工人集団の差を示す点では、大まかな点では一致する。

・色調、降灰

焼成実験や胎土分析などの結果、色調や降灰は、主に窯内の温度とその推移、燃料材の種類などが大きな役割を果たすことが明らかとなった（佐々木・余語二〇〇四など）。また、同じ窯での別々の焼成でも、色調・降灰の状況が異なることが多い。さらに、須恵器焼成は基本的に、酸化焰焼成から薪を大量に投入し、窯内を閉じて還元焰焼成へと移行する。また、焼成を終了した段階でも還元焰雰囲気を保つ、保たないの違いで断面の色調と表面（内面・外面）の色調が異なる（安里一九八五）。つまり、こうした内面・外面・断面と各部位の色調や降灰は、偶然の産物の物も当然あるが、各工人の持つ焼成技術に左右されると考えられる。

また、古墳時代の土壙墓出土一括須恵器の分析では、この焼成痕跡から流通状況を判断することがある（木許二〇〇九）。つまり、出土須恵器の色調や降灰の具合から、同時に焼成された製品を判断

・製作技法①く底部・天井部外面の調整く

鞠智城の須恵器の小型器種底部は、ヘラ切り未調整、回転ヘラケズリ（時計・反時計回り）、不定方向ナデ、不定方向ケズリなど様々な技法を用いる。回転方向は工人の利き手に左右され、回転ヘラケズリやヘラ切り未調整は、同時期にも混在する場合もあるため、時期的な特徴のみならず、地域差、工房差、工人差を間接的に示す。

・製作技法②く底部・天井部内面の不定方向ナデく

坏身・坏蓋の底部に施す不定方向ナデは、各地で普遍的にみられる。管見ではこの不定方向ナデの目的や意義に関する研究は見られないが、筆者が観察した伊藤田窯跡群②では、草場窯跡の窯内出土品（同一時焼成品）をみると、すべてが直線状の不定方向ナデを施す。逆にヘラ記号を持ち、複数の窯元で窯を共有するタイプの穂屋一号窯跡では、ヘラ記号ごとで不定ナデの施し方が異なる。つまり、不定方向ナデの有無とその違いで、工房ごとの製品の違いが区別できる可能性を秘める。なお、不定方向ナデを施す意味については、筆者が各地の資料を実見したところ①内面に施す同心円文スタンプを消す②製作技法上の意味はなく、単なる工人が無意識に施すクセ③粘土紐巻き上げ時の器面の凹凸を消す の三つが可能性として考えられる。

・胎土の観察

近年では理化学的な胎土分析が広く実施され、成果を挙げている。しかし、理化学的分析では、常に経費や遺物の保存などの問題が立ちはだかるため、すべての出土資料に使えるものではない。この点、肉眼での胎土観察との併用が望まれる。後藤建一氏は、肉眼観察で胎土に含まれる鉱物や砂粒の状況を観察し、生産地と消費地

することができる。

ただし、窯内の窯詰の位置、平面（焚口側や窯尻）と立面（床面側か天井側）で色調が若干異なる。その際、これらの製品の区別は困難で、この点については今後の課題であることをここで確認しておく。

以上をまとめると、第1図になる。いずれも、すべての観察項目の全てを満たすならば、間違いなく同一工房製品・同一

細部形態	同一工房製品	同一時焼成品
法量 (今回は使用しない)		
製作技法①		
製作技法②		
ヘラ記号		
胎土の観察		
色調・降灰		

第1図 観察項目と同一時焼成品・同一工房製品との関係

時焼成品だが、破片資料が多く、困難を伴う。したがって、同一時焼成品ならば、今回検討する五つのうち、すべてか、四項目当てはまるものを同一工房製品とする。同一時焼成品は、観察項目が少ないため、今回は二つのうちすべて満たすもののみを同一時焼成品とする。

(三) 検討の方法

以上の研究視点を基にして、以下の手順で検討を進める。

①鞠智城および周辺の対象遺跡出土の須恵器を集成し、上記の観察項目に従いすべてを実見する。②実見した須恵器を器種ごと、時期ごとに分離したのち、上記に挙げた観察項目に基づき分類する。③第1図を使用して、同一工房製品と同一時焼成品を抽出する。④各遺跡にフィールドバックし、比較検討し、各々の共通点や差異点を提示する。⑤これらの比較や、他の注目できる点を通して、鞠智城の

須恵器流通の状況を復元する。

なお、今回は時間の都合上、鞠智城周辺すべての遺跡出土資料を実見できなかった。そこで、今回は比較的須恵器が多数出土する鞠智城を軸に、前畑遺跡、伊坂東原遺跡、うてな遺跡、上鶴頭遺跡を対象に検討した。対象時期は七世紀後半から八世紀、一部九世紀で、対象器種は、可視的属性が最も多く、検討しやすい椀・坏蓋・甕（口縁部）とした。

三・検討

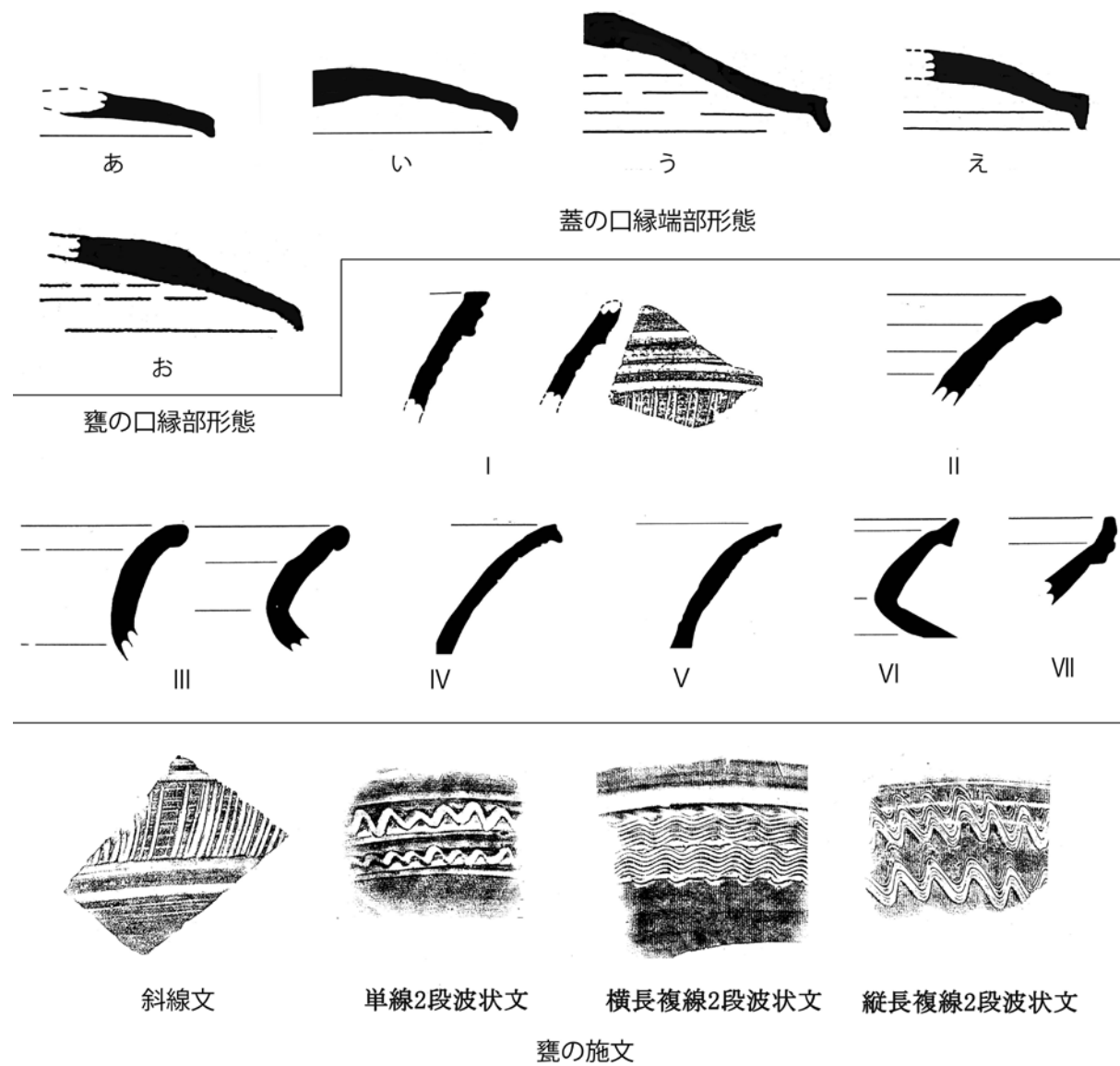
ここでは各対象器種を検討するが、各器種共通の属性のヘラ記号と各種焼成痕跡、小型器種共通の内面不定ナデは、最後に分類する。

(一) 椀

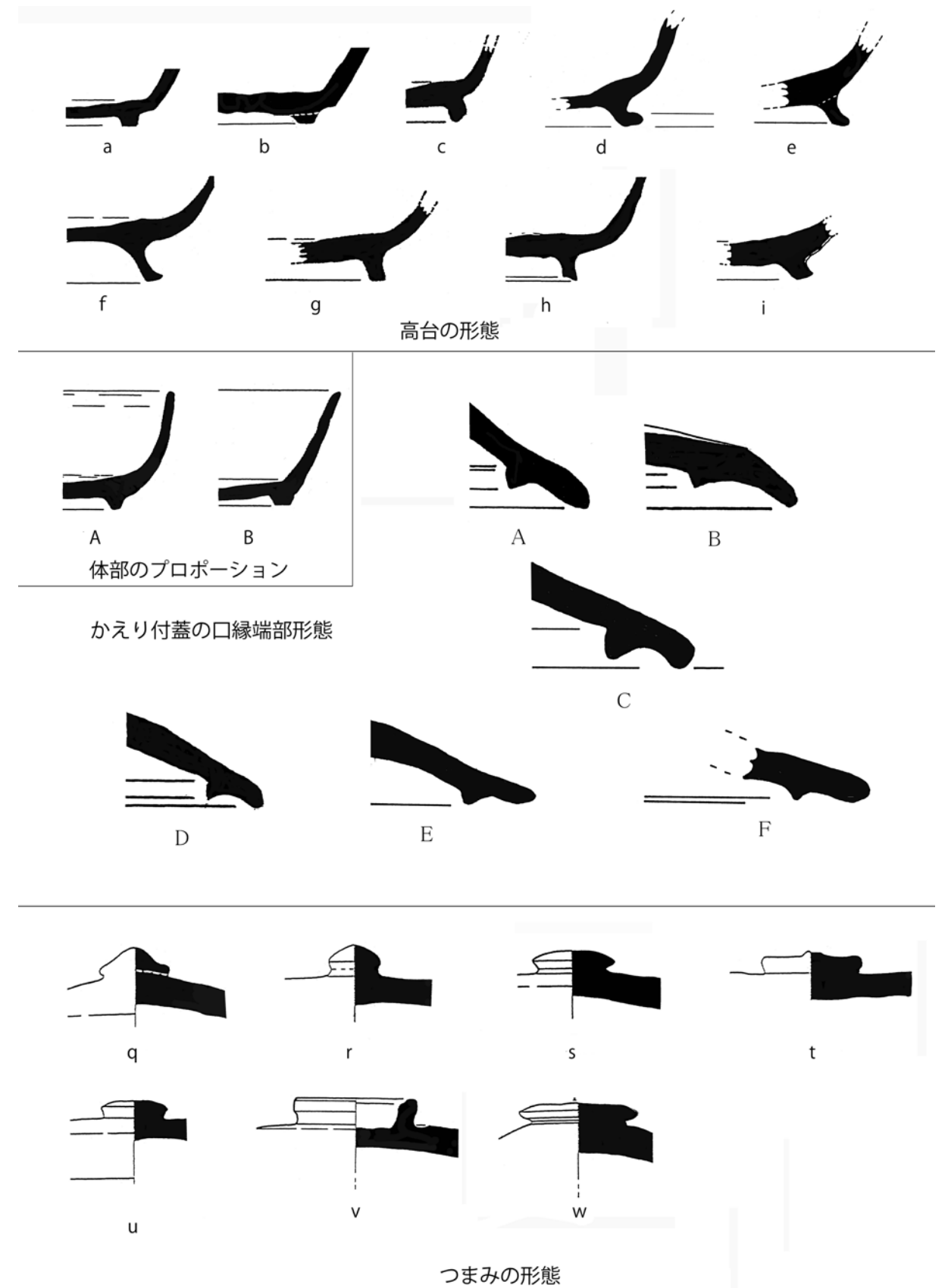
椀は、高台の形態、体部のプロポーション、底部外面の技法、内面の調整、ヘラ記号を観察対象とする。以下に分類基準を羅列する。

・高台部の形態

a 類 高台部断面がほぼ方形で、短く、わずかに高台貼り付けナデで内側が緩やかに湾曲する。



第3図 各属性の分類②



第2図 各属性の分類①

b 類高台部断面は台形状になり、短く両側は緩やかに湾曲しながら底部に接続する。

c 類高台がやや長く、断面が「く」字状になり、接地面が鋭い。

d 類前者よりさらに長く、体部から垂直に伸びたのち、中ほどで折れ曲がり、端部は水平となる。

e 類 d 類より高台中ほどの屈曲が弱くなる

f 類高台が最も長く、外に反りながら、端部付近でやや折れ曲がる。

g 類高台が長く、断面長方形を呈し、底部からほぼ垂直に伸びる。

h 類断面長方形で、i 類と近似するが、接地面の中ほどで明瞭に沈む

i 類高台はやや短く、断面は方形状で、やや外に反る。

・体部のプロポーション

A 類体部最下部から緩やかに湾曲しながら口縁部まで立ち上がる

B 類体部最下部からほぼ直線的に立ち上がる

・底部外面の調整

X 類回転ナデ

Ya 類時計周り回転ヘラケズリ

Yb 類反時計回り回転ヘラケズリ

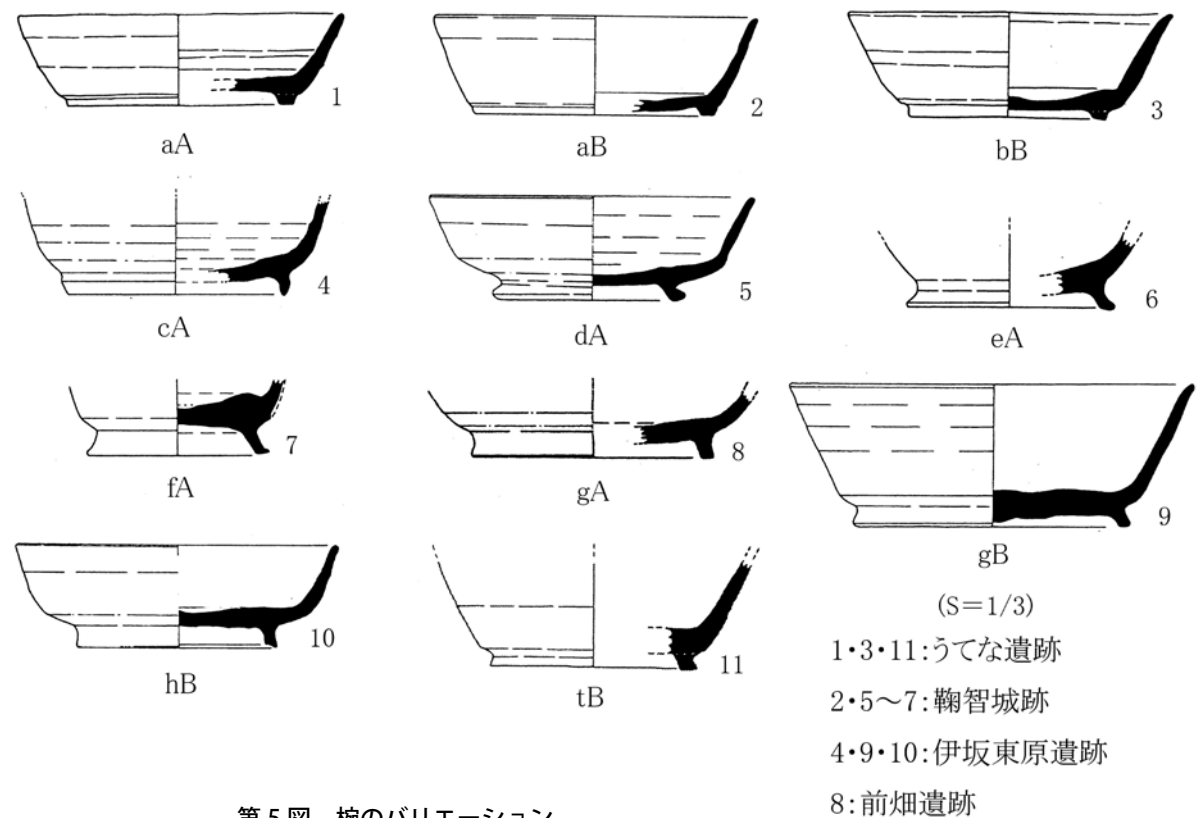
Z 類不定方向ケズリかナデ

また、形態に関わる属性の分類同士の相関関係を検討した結果、次のような類型を設定できる。

a A 型高台は断面台形で、中心部側に傾き、体部は丸みを帯びながら緩やかに立ち上がる一群。

a B 型高台は断面台形で、中心部側に傾き、体部は丸みを帯びながら緩やかに立ち上がる一群。

g A 型脚部断面が長方形で、比較的長く、体部は曲線的に立ち上がる一群。



第5図 碗のバリエーション

る一群。

g B 型高台部断面が長方形で比較的長く直線的に伸び、体部は直線的に立ち上がる一群。

同じように類型設定すると、第5図になる。

同様の方法で、蓋、甕も分類し、第2・3図に提示した。

(二) 対象器種に共通する観察点とその分類

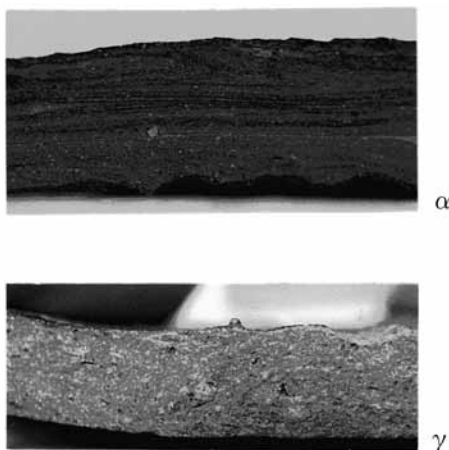
ここでは、各器種に共通の属性に関して、分類する。

・胎土の観察

胎土 α 類肉眼観察では目立ったものはない

胎土 β 類 ○・五mmほどの白色粒子を含み、器面はなめらか

胎土 γ 類 ○・五mmほどの白色粒子を含み、二・三mmの白色小礫を含む。器面はなめらか



第4図 各属性の分類③ 胎土の観察

含む。器面はなめらか
胎土 δ 類 ○・五mmほどの白色粒子を多く含み、器面は粒子・小礫による凹凸があり、粗い
・自然釉・胎土の色調
これについては、土色帳を用いて検討した。

四、同一工房製品・同一焼成品の抽出

(一) 同一工房製品の抽出

次に、同一工房製品を抽出するが、先述した形態でのまとまりに加えて、製作技法、内面不定方向ナデ、ヘラ記号を基に抽出する。

・碗

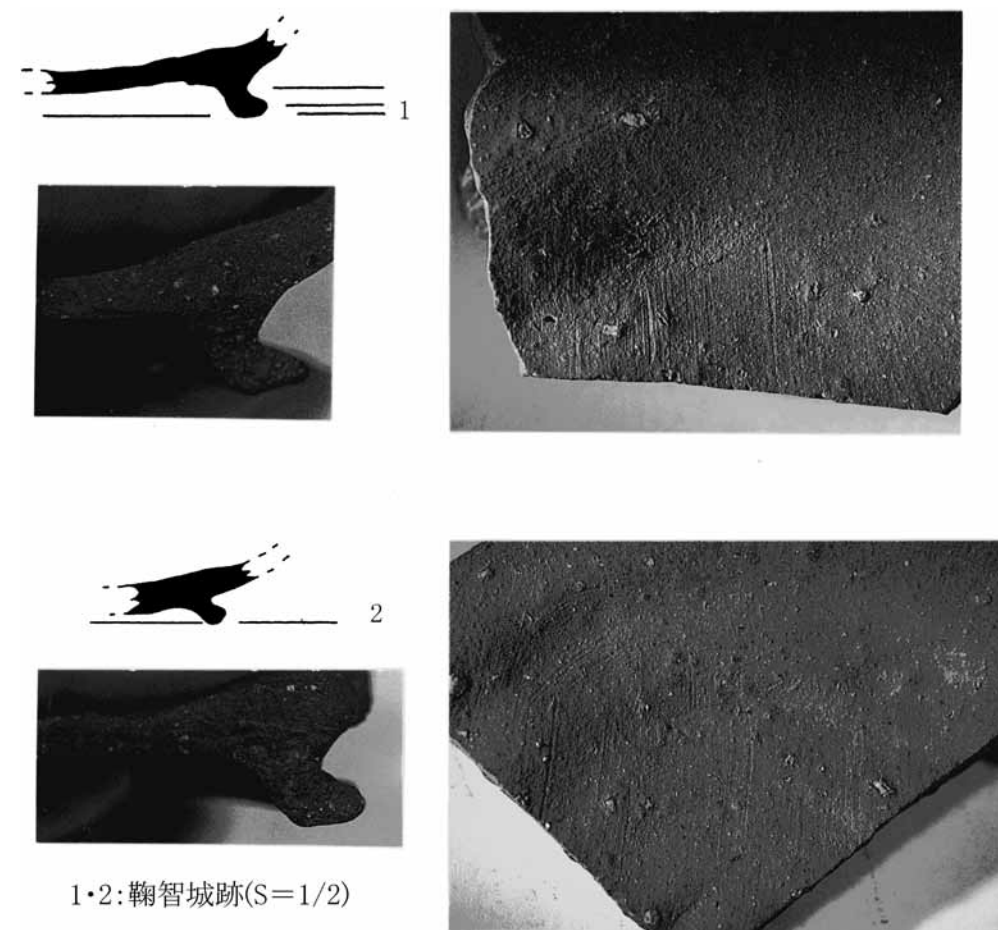
まず、d A 型の中で、鞠智城出土の二点を見ると(第6図)、内面不定ナデの状況、底部外面の技法、細部属性、胎土の状況、焼成状況が全く同じで、上記の観察項目と認定条件をすべて満たすため、明らかに同一工房の製品である。また、e A 型の伊坂東原遺跡出土品では(第7図)、底部外面の幅広い回転ナデと中心のケズリ跡、胎土がまったく一致する。そして、両者とも良く残らないが、内面の不定ナデも一致する。よって、同一工房製品であろう。

b B 型では、鞠智城出土品の中で(第8図)比較資料があるが、底部の調整が異なるため、可能性が高いにとどめざるを得ない。問題は、うてな遺跡との対比で、底部の調整、胎土、焼成状況が類似する。また、底部は良く残らずに、不定方向ナデの状況も不明な部分が多いが、ナデが底部と体部の境まで直線的に伸びて、複数のナデ線で構成する点で類似する。よって、両者は同一工房製品の可能性がある。g A 型では、伊坂東原遺跡出土の第9図が類似するが、可能性

にとどめざるを得ない。

・かえりのない蓋

今回の対象資料のかえりなし坏蓋は、破片資料が多く、同一工房



1・2: 鞠智城跡(S=1/2)

第6図 同一工房製品①

製品の可能性がある製品でも、いまいち確証に欠ける。その中で、唯一確実な同一工房製品と考えられるのが、え類の前畑遺跡出土品である(第10図)。いずれも天井部を反時計回り回転ヘラケズリで、内面不定ナデは、幅が広く直線的である。胎土も同じ分類に入るので、同一工房製品である。その他、今回はかえり付蓋や、甕類で同一工房製品は確認できなかった。

(二) 同一時焼成品の抽出

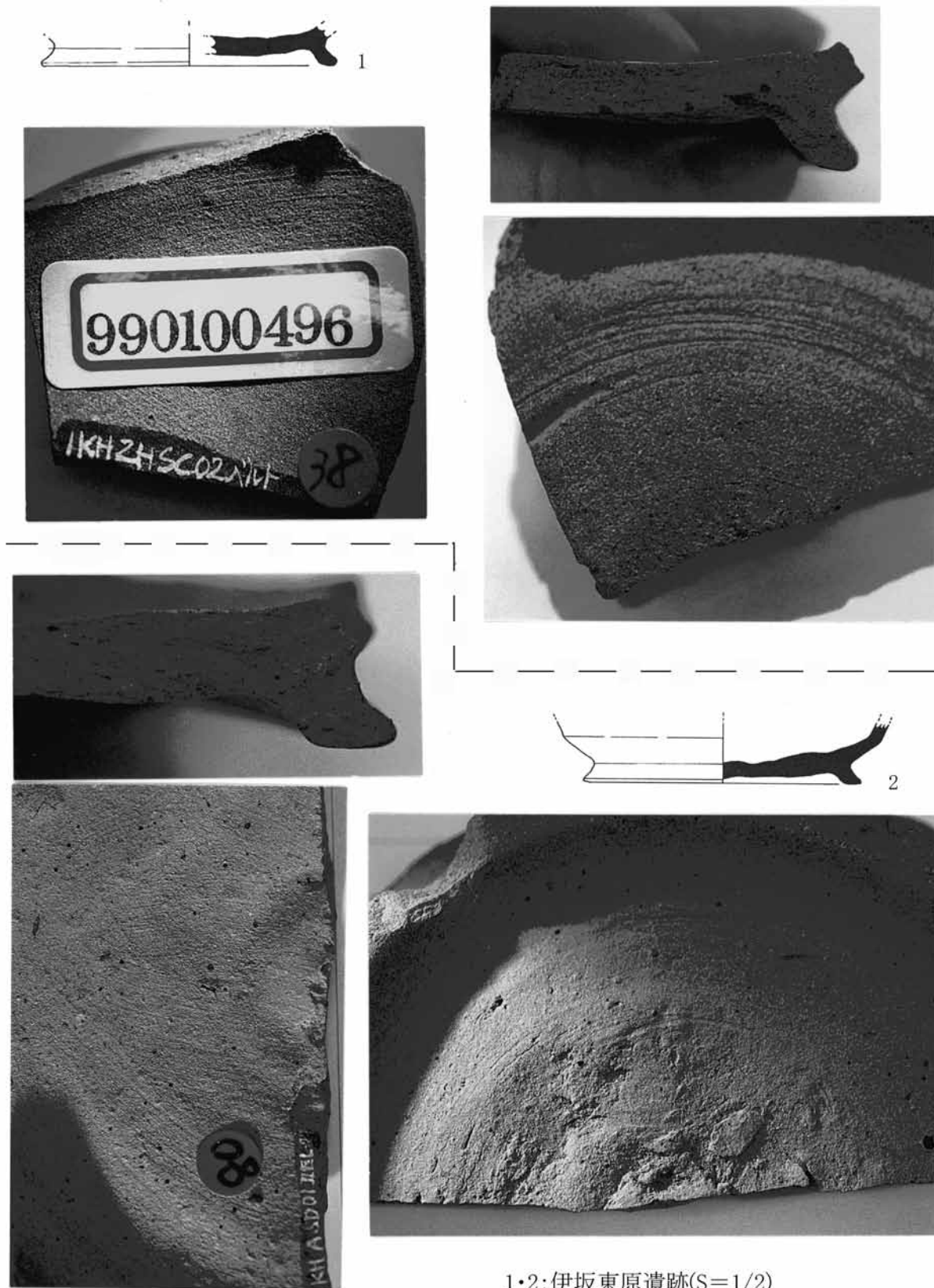
同一時焼成品の抽出に当たっては、焼成状況、自然釉の状況を観察項目に加えて抽出する。

その結果、伊坂東原遺跡で一セット確認できた(第11図)。外面全体に、黒緑色状のガラス化した降灰が全体にかかり、胎土、色調も同じである。また、口縁端部形態は異なるが、内面不定ナデは類似する。

五・考察

(一) 八世紀代の鞠智城周辺の須恵器流通状況

鞠智城やその周辺の須恵器流通範囲は、古墳時代から七世紀代にかけて言及される。木村龍生氏は、古墳時代以降と鞠智城築城以降の須恵器流通状況を明確にする(木村二〇〇九・二〇一二a)。ただし、検討の性格上、七世紀後半以後の鞠智城を除く周辺遺跡の須恵器の流通状況については不明な部分が多かった。そこで、七世紀後半から八世紀代までの須恵器の流通状況について考察する。



1・2: 伊坂東原遺跡(S=1/2)

第7図 同一工房製品②

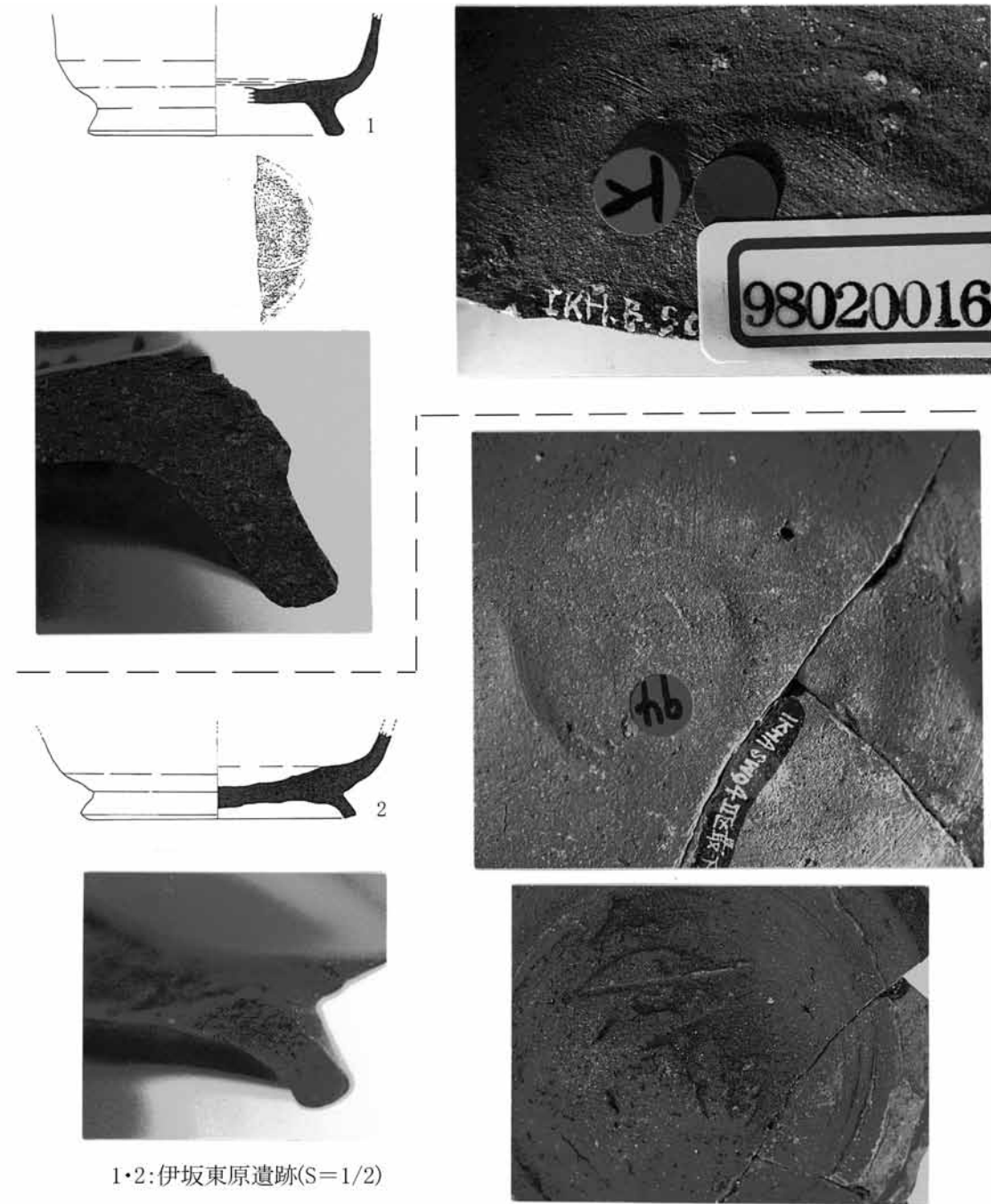
まず、椀類を鞠智城での胎土分析（熊本県教育委員会二〇一二）、特定の生産地にしない形態、製作技法などを参考にして産地を考えてみたい。

まず椀のe A型は、一部八世紀代ものも含まれるが、基本的に七世紀第4四半期である。この中で、鞠智城出土品が胎土分析・肉眼観察の結果、荒尾産と判断される。そして、前畑遺跡、伊坂東原遺跡例のものが確認できる。

d A型は、基本的に七世紀第4四半期で、胎土分析と肉眼観察の両者から荒尾産である。伊坂東原遺跡で1点出土する。

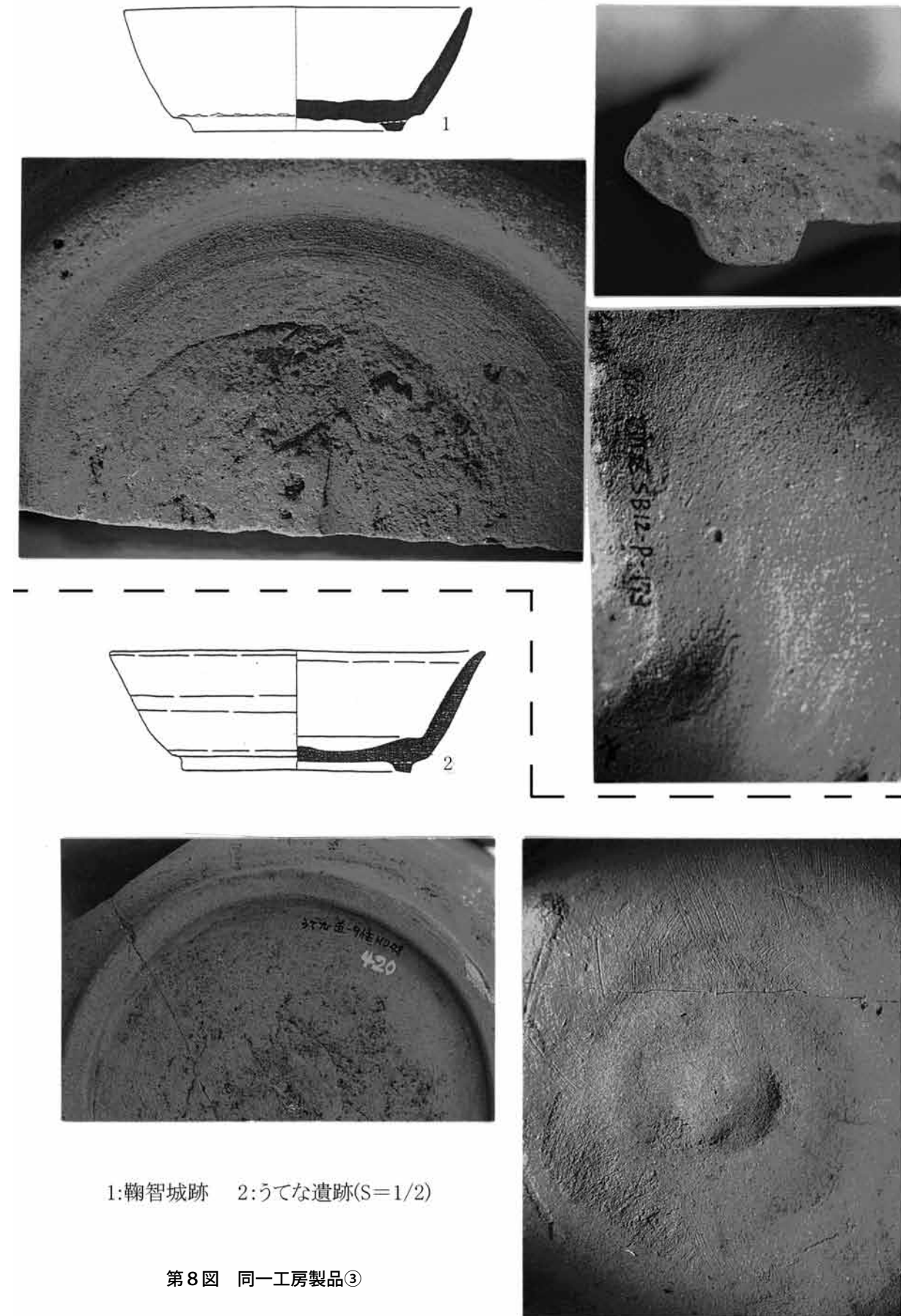
さらに、f A型は、基本的に七世紀代のものであるが、このうちの一点が、胎土分析で牛頸産とされている。ただし、対象資料中で集落出土品でこの類型に当たる資料はなかった。

八世紀後半のb B型も、牛頸産との結果が出ており、集落遺



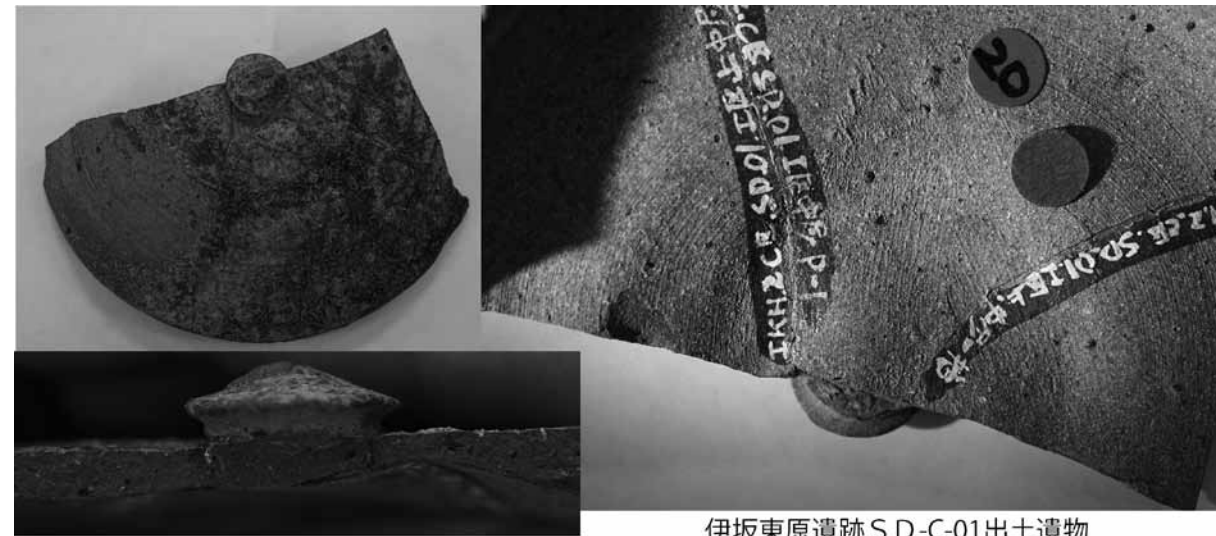
1・2:伊坂東原遺跡(S=1/2)

第9図 同一工房製品④



1:鞠智城跡 2:うてな遺跡(S=1/2)

第8図 同一工房製品③



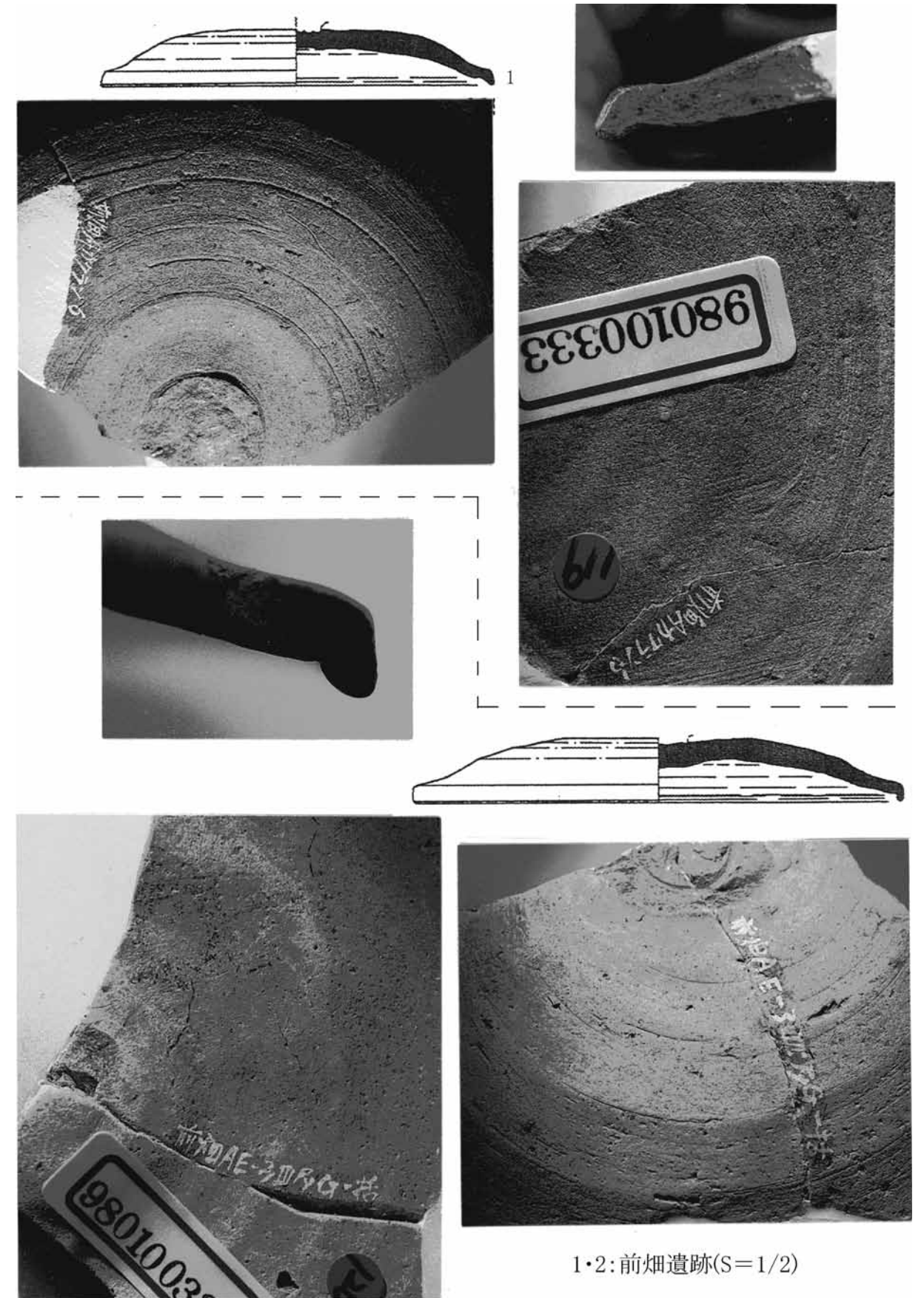
伊坂東原遺跡 S D-C-01 出土遺物



伊坂東原遺跡
SD-A-01 出土遺物

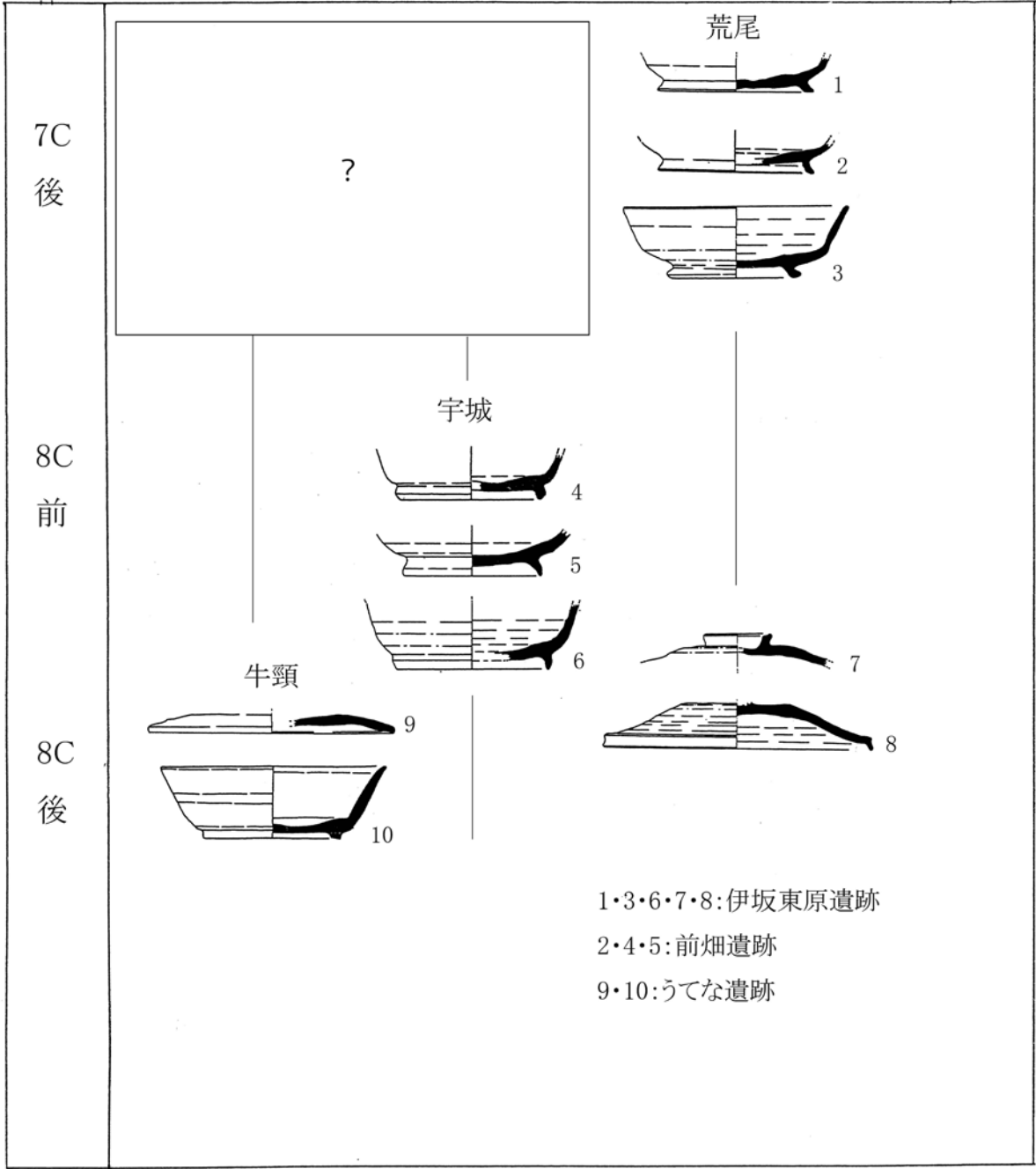
第 11 図 同一時焼成痕跡

跡でも数点出土する。
他の領域では胎土分析などがなされていないため、詳細は不明である。そこで、ある生産地特有の形態を持つ須恵器に注目する。まず、c A 型の椀は、高台断面が「く」字になっており特徴的で、宇城窯跡群の萩尾大溜池窯跡群採集須恵器の中に類例が多く（網田二〇〇三）、他の窯跡群にはほばない。八世紀前半から中頃で、集落でも伊坂東原遺跡で出土する。
かえり付蓋のうち、胎土分析が行われているのは A・B 類で、いずれも荒尾産との結果が出た。しかし、集落遺跡などでは出土しない。
つまみに注目すると、胎土分析で八女産としているものが一点出土するが、対象資料中集落遺跡で類例はない。輪状つまみを持つ蓋が一定数出土するが、荒尾産に特有で、他では例がない（石木二〇〇七・網田二〇〇三）。少数だが、集落遺跡でも出土する。
したがって、七世紀後半代では出土数自体が少ないため、詳細は不明だが、少なくとも荒尾産須恵器と牛頸産須恵器が搬入されている。



1・2: 前畑遺跡(S=1/2)

第 10 図 同一工房製品⑤



第12図 鞆智城及び周辺遺跡の須恵器流通状況

八世紀代の集落では、少なくとも牛頸、荒尾、宇城窯跡群から須恵器が供給される点は明らかである。八女産須恵器についても、同様に確認できる可能性が非常に高い。したがって、複数の生産地から搬入される点が特徴で、その点、例えば牛頸窯跡群と、その周辺のような、大規模窯跡群周辺の流通状況とは当然異なる。そして、鞆智城との間に現状では明確な生産地（窯跡群レベル）での流通の違いは見受けられない。

(二) 同一工房製品、同一時焼成品の不在は何を示すのか
― 鞆智城からみた須恵器生産・流通構造の素描 ―

先の検討で、同一工房製品や同一時焼成品は鞆智城および周辺遺跡では、少数ではあるが確認できた。これは何を示すのか。

まずは、ヘラ記号に注目したい。現状では複数の記号が確認できるが、ヘラ記号の存在は、須恵器製作集団の違い（中村一九七七など）

や、有無によって須恵器生産システムの違いと受け止められる。特に中村氏は、焼成時に天井が崩落、廃棄され、一括で出る須恵器群の検討から、一つの須恵器窯を複数の須恵器製作集団の共有の結果とした（中村一九七七）。そして、須恵器工人集落では、窯の周りに複数の須恵器工人集団の支群を配置して、各支群で成形後、共有の窯で焼成する集落が実際に存在し、筆者はこれを「新道里型」と名付けた（太田二〇一五）。

一方で、ヘラ記号のない遺物もかなりの数にのぼる。そして、これらを各分類に当てはめると、一つの窯跡群の中でも複数の生産集団が生産に当たる様相が浮かぶ。これらが工人集落類型のどれに当てはまるかは現状で不明だが、西日本最大級の牛頸窯跡群で複数の生産システムが同時に動く点を考えれば（太田二〇一五）、少なくとも、複数の生産システムの下で生産された須恵器が運ばれた点は間違いない。

ここで注目できるのが、同一工房製品・同一時焼成品の存在である。時期は異なるが、古墳時代後期や七世紀代の古墳、土壙墓の須恵器は、焼成時のセット関係を保ったまま副葬するため、諸属性が同じで、焼成痕跡、焼き具合が同じ製品が出土することが多い（木許二〇〇九など）。鞆智城で出た須恵器は現状で一〇セットにも満たない。これは、出土遺物が明確な遺構に伴わず、一括出土品でもない点や、「今」不在だけで今後発見される可能性も当然あるが、これを勘案しても少なすぎる。仮に焼成時の窯詰のセット関係を保つならば、同一工房製品や同一時焼成品が多少は出るはずである。

このように考えると、鞆智城出土須恵器は、焼成時のセット関係をあまり保っていないと考えられる。

さらに、鞆智城から八女・宇城・荒尾・牛頸は、かなりの距離があるため、それぞれの生産システムを持つ各須恵器製作集団がそれぞれ別個に須恵器を鞆智城に搬入するとは考えにくい。

つまり、同一工房製品と同一時焼成品の少なさ、各類型のヘラ記号、消費地と窯との関係を考えると、生産時では、各々異なる生産システムを持つ須恵器工人集団が、須恵器を生産したのち、窯跡群単位で一度集積、出荷し、一部は鞆智城に搬入された可能性が浮かぶ。このように考えると、生産地ごとで完成品を集め、出荷するような場所と、直接統括する「仲介者」の存在を想定しても、無理はない。これと正反対なのが、近年大伽耶時代の築城が明らかになった高霊主山城である（大東文化財研究院二〇一〇）。時期や地域は当然異なるが、筆者の実見した限りでは、複数の窯から供給されており、同一時焼成品と考えられる製品が一定量確認できる。そして、最近では主山城に供給したと考えられる窯跡が近隣で調査されているため、両者の須恵器の受容と供給は異なる可能性が高い。

六．まとめ

以上、鞆智城と周辺遺跡での須恵器流通状況について検討した。結果は、以下に集約される。

- ① 少なくとも集落と鞆智城に搬入される須恵器の流通状況は、八世紀代では類似する。
- ② 単一遺跡で出た須恵器には、明らかに同一工房製品や、同一時焼成品が含まれ、ある程度の工房・焼成時のまとまりを保ったまま各

遺跡へ運ばれる状況が想定できる。しかし、窯出し直後のまとまりを持つ古墳、土壙墓などより圧倒的に少数である。

③さらに、現状で、各遺跡間での確実な同一工房製品や同一時焼成品は、確認出来ない。

④各遺跡を比較検討した上で、鞠智城での須恵器の種類や、各類型で、ヘラ記号の有無や種類の多さから、様々な生産システムを持つ窯跡の製品が搬入される可能性がある。

⑤ ①④や、鞠智城と生産地との距離関係を参考にすると、各生産システムを持つ窯元の完成品を集めて保管、出荷すると考えられる。

（謝辞）

本稿は、平成二七年度鞠智城『特別研究』の成果である。本稿を成すにあたり、木村龍生氏、矢野裕介氏には、鞠智城の資料の実見で様々な便宜をはかっていただいた。また、各地の資料調査でも、様々な方々からご協力いただいた。記して感謝申し上げたい。

福岡市埋蔵文化財センター 熊本大学考古学研究室 菊池市教育委員会 合志市教育委員会 熊本県教育委員会 大分県埋蔵文化財センター 福岡大学考古学研究室（財）北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室（財）大東文化財研究院（財）ウリ文化財研究院

木崎康弘 木村龍生 小嶋篤 佐藤信 武末純一 長安慧 桃崎祐輔 森門碧 矢野裕介 山元遼平 輪内遼 金才喆 金武重 趙晟元 （順不同・敬称略）

注

（一）この点については、現在別稿を執筆中である。

北部太平洋沿岸の横穴と遠隔地交流』海の古墳を考える会

中村浩一九七七「須恵器生産に関する一試考・和泉陶邑窯における陶工組織に

ついて」『考古学雑誌』第六三巻第一号 日本考古学会

山田元樹一九八八「須恵器窯業生産の様相解明にヘラ記号が果たし得る役割の

検討」『九州考古学』第六二号

安里進一九八五「須恵器の断面色層との世紀の焼成技術」『考古学研究』第三二

巻第三号 考古学研究会

山本雅和二〇〇八「古墳時代の須恵器生産組織について」『吾々の考古学』和田

晴吾先生還暦記念論文集刊行会

旭志村教育委員会二〇〇三『前畑遺跡』旭志村文化財調査報告 第五集

旭志村教育委員会二〇〇三『伊坂東原遺跡 第一次・第二次調査』旭志村文化

財調査報告 第六集

熊本県教育委員会一九八三『上鶴頭遺跡』熊本県文化財調査報告 第六三集

熊本県教育委員会一九九二『うてな遺跡』熊本県文化財調査報告 第二二集

熊本県教育委員会二〇一二『鞠智城跡Ⅱ―鞠智城跡第八―三二次調査報告』

熊本県文化財調査報告書 第二七六集

（財）大東文化財研究院二〇一四『高霊 主山城Ⅰ』（財）大東文化財研究院 學術調査報告 第六四輯

挿図出典

第1図 筆者作成

第2・3図 筆者実測・トレース

第4図 筆者撮影

第5図 1・3・11は熊本県一九九二 2・5・7は熊本県二〇一二

4・9・10は旭志村二〇〇三 8は旭志村二〇〇三 を改変

参考文献

網田龍生二〇〇三「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究Ⅳ』

龍田考古会

石木秀啓二〇〇七「牛頸窯跡群と九州の須恵器生産体制」『国立歴史民俗博物館

研究報告』第三四集 国立歴史民俗博物館

太田智二〇一五「須恵器工人集落の研究 序・牛頸窯跡群での様相」『古文化

談叢』第七四集 九州古文化研究会

太田智二〇一六「日韓土器工人集落の研究・須恵器・陶質土器を中心に」『第

二七回東アジア古代史・考古学研究会交流会 研究発表資料集』

岡田裕之二〇〇四「古墳時代における須恵器の生産単位について・須恵器に記

されたヘラ記号の目的と関連して」『史淵』一四〇号

木村龍生二〇〇九「陶邑編年と九州の古墳時代須恵器について」『考古学研究』

五六・一 考古学研究会

木村龍生二〇一二a「鞠智城出土の土器について」『鞠智城跡Ⅱ・鞠智城跡第八

―三二次調査報告』熊本県文化財調査報告第二七六集 熊本県教育委員会

木村龍生二〇一二b「九州古墳時代須恵器の生産と流通」『生産と流通』第一〇

回九州考古学会・嶺南考古学会合同大会

木許守二〇〇九「群集墳被葬者における須恵器の流通について」『考古学研究』

第五六巻第三号 考古学研究会

後藤建二〇〇〇「古墳出土須恵器にみる地域流通の解体と一元化・駿河西部域

における六世紀から七世紀の古墳出土須恵器を事例として」『日本考古学』

第九号 日本考古学協会

佐々木幹雄・余語琢磨「須恵器の色―実験的技術復元と理化学的分析に関する

考察―」『古代』第一二二号 早稲田大学考古部会

鈴木敏則二〇一四「湖西窯における須恵器生産」『海の古墳を考えるⅣ・列島東

第6図 筆者実測・トレース・撮影

第7図 筆者撮影 図面は旭志村二〇〇三を改変

第8図 筆者撮影 図面のうち1は熊本県二〇一二、2は熊本県一九九二を改変

第9図 筆者撮影 図面は旭志村二〇〇三を改変

第10図 筆者撮影

第11図 筆者実測・トレースしたのち作成

第12図 筆者実測・トレースしたのち作成